福岡市埋蔵文化財調査報告書第814集

箱　崎　20

―― 箱崎遺跡群第38次調査 ――

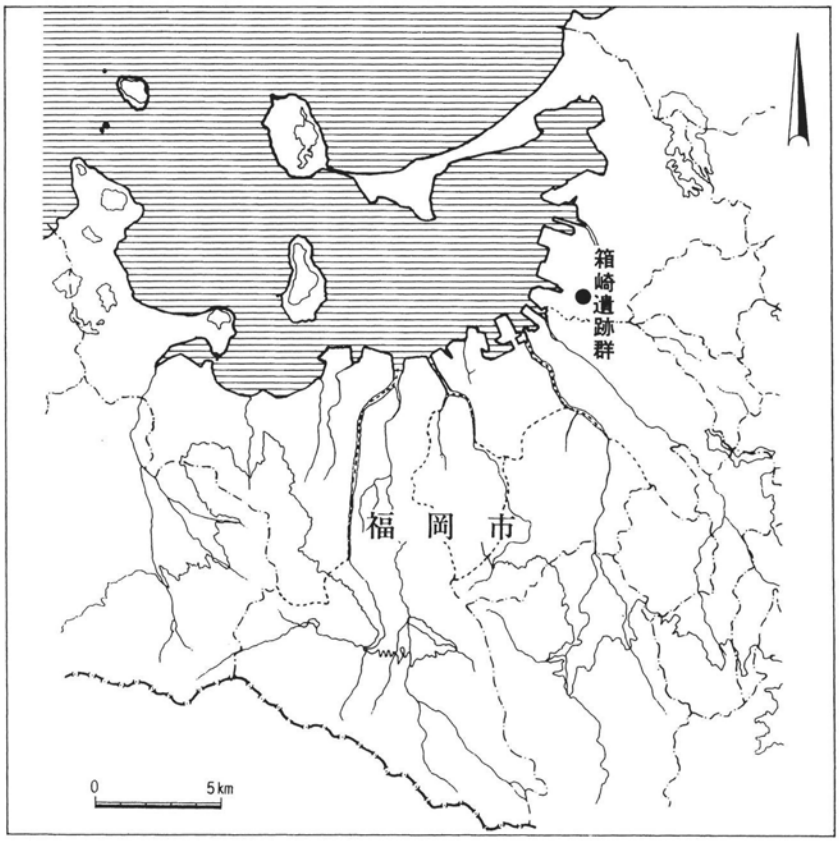
2004

福 岡 市 教 育 委 員 会

箱崎（はこざき） 20

―― 箱崎遺跡群第38次調査 ――

福岡市埋蔵文化財調査報告書第814集



調査番号　0260
調査略号　HKZ-38

2004

福岡市教育委員会

序

福岡市では北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸との人、物、文化の交流が絶え間なく続けられてきました。この地の利を生かした人々の歴史を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むなか明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものも多く、学術研究上、注目されているところです。

今回の発掘調査は中世の国際都市として繁栄を続けた博多とともに、アジアとの貿易を通じて発展した箱崎遺跡群の調査です。調査では井戸や建物跡などの生活の痕跡とともに荒海を渡る交易船に積まれ商人によって取引された様々な中国宋代の陶磁器が多量に出土し、当時の活気を偲ばせます。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく、多様な開発で消滅する埋蔵文化財について実施した記録保存の一つです。研究資料として、また埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査に際しご協力いただいた関係者各位の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成16年３月31日

福岡市教育委員会
教育長　生田征生

例　言

1．本書は福岡市東区箱崎３－９－49において福岡市教育委員会が2002年度（2003年３月）に実施した調査報告書である。
2．調査は荒牧が担当し、遺構図面、写真等の記録作製を行った。
3．本書に掲載した遺物実測は相原聡子と荒牧が行い、浄書は大石菜美子、小金丸昌代が行った。
4．本文は荒牧が執筆した。
5．本書掲載の実測図、写真、遺物等、調査で得られた資料類は福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・保管され、公開、活用されていく予定である。

凡　例

1．本書掲載の遺構図方位は国土座標による。
2．掲載した遺物は通し番号を付している。

報　告　書　抄　録

ふりがな	はこざき20
書名	箱崎20
副書名	箱崎遺跡群第38次調査
巻次	20
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第814集
編著者名	荒牧宏行
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810－8621　福岡市中央区天神1－8－1　Tel.092－711－4667
発行年月日	2004年（平成16年）3月31日

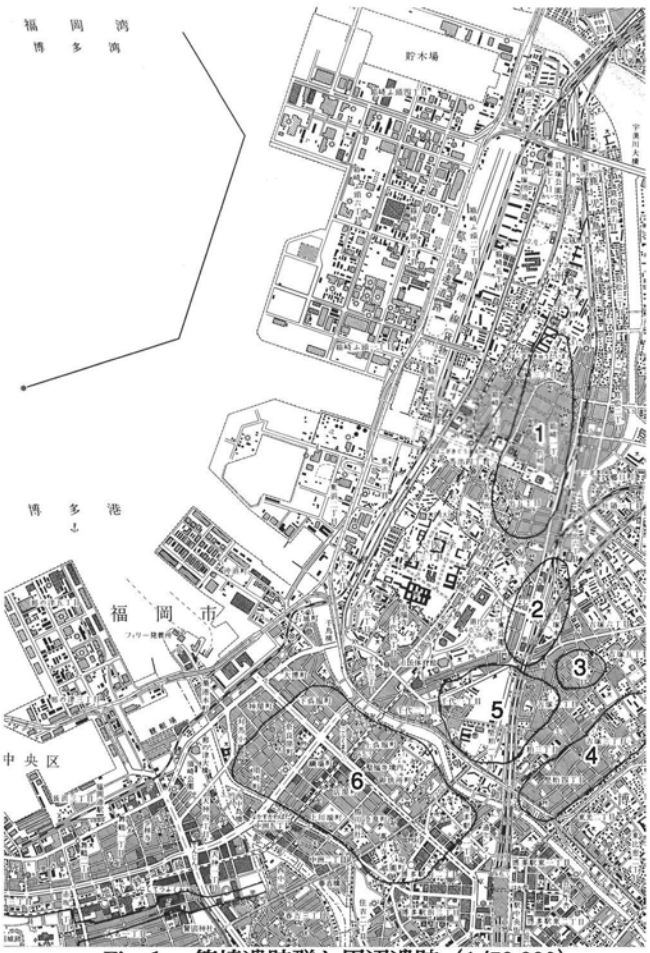
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
はこざきいせきぐん 箱崎遺跡群	ふくおかけんふくおかしひがしく 福岡県福岡市東区 はこざき 箱崎3－9－49	40131	2639	33°37′12″	130°25′29″	20030203 ～ 20030208	90m^2	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡群	集落 （都市）	中世	井戸５基 土壙約20基	輸入陶磁器	遺構は13世紀後半から14世紀初頭が中心。現在の町並みの方向と同じ布掘柱列を検出。ガラス坩堝、鉄滓出土。

本文目次

頁

Ⅰ．はじめに …… 1
　1　調査に至る経過 …… 1
　2　調査の経過 …… 1
　3　調査体制 …… 1
Ⅱ．位置と環境 …… 2
Ⅲ．調査の記録 …… 3
　1　調査の方法と概要 …… 3
　2　基本層序 …… 3
　井戸（SE）
　　SE07 …… 6
　　SE77、80 …… 9
　　SE123　SE104 …… 13
　土壙（SK、SX）
　　SK02 …… 16
　　SK05　SK06　SK18　SX43　SK65　SK13 …… 18
　　SK101　SK66　SX132 …… 22
　　SX107　SX94 …… 23
　建物跡（SB）
　　SB01 …… 23
　　SB02 …… 24
　　柱穴出土遺物　銅銭　表土出土遺物 …… 24
　　骨 …… 24
Ⅳ．おわりに …… 24



1　箱崎遺跡群　　2　吉塚本町遺跡群
3　吉塚祝町遺跡群　4　吉塚遺跡群
5　堅粕遺跡群　　6　博多遺跡群

Fig. 1　箱崎遺跡群と周辺遺跡（1/50,000）

Ⅰ．はじめに

1　調査に至る経過

平成14年３月６日付で光吉　フサ、光吉　勉　両氏から箱崎遺跡群に含まれる福岡市東区箱崎３－９－49における自宅兼賃貸マンション建設計画を記した埋蔵文化財事前審査申請書が提出された。これを受けて埋蔵文化財課では同年４月12日に試掘を行って遺構を確認し、協議を重ね平成15年２月３日からの調査に至った。

2　調査の経過

杭打ち工事が先行し、調査は掘削周囲の矢板打ちの立会いから始まった。矢板の長さが短く、矢板の下端レベルは地山面近くまででであった。そのため、表土剥ぎ作業では矢板内に中間レベルで犬走りをつけ以下のり面を成形し掘削した。また、北壁側は隣接した土塀が傾倒していたために土塀を補強するとともに、矢板は設置せず、土塀から離れた位置から掘削し、のり面を成形した。このような事情から調査が行えた地山面における面積は90㎡と狭くなった。

また、廃土処理を同敷地内で行う必要から調査区を半割し、掘削は反転して行った。まず、敷地奥側の東半（Ⅰ区）からはじめ、反転後の西半部をⅡ区と称した。

調査終了は同年３月８日になり約１月を要した。

3　調査体制

調査・整理作業は以下の体制で臨んだ。

（調査主体）福岡市教育委員会　（調査総括）埋蔵文化財課長　山崎純男　調査第2係長　田中寿夫　（庶務）文化財整備課　御手洗清　（試掘調査・協議）事前審査係長　池崎譲二　担当　田上勇一郎　（調査担当）荒牧宏行　（調査作業員）石川洋子　伊藤美伸　平井武夫　水野由美子　播磨千恵子　桑原美津子　吹春憲治　林厚子　乾俊夫　（資料整理）松下伊都子　金丸幸加、小金丸昌世　大石菜美子　相原聡子

なお、調査中にあたっては株式会社吉川工務店に条件整備をはじめ色々と協力を頂いた。記して感謝します。

Ph.1　調査区現況（南東から）

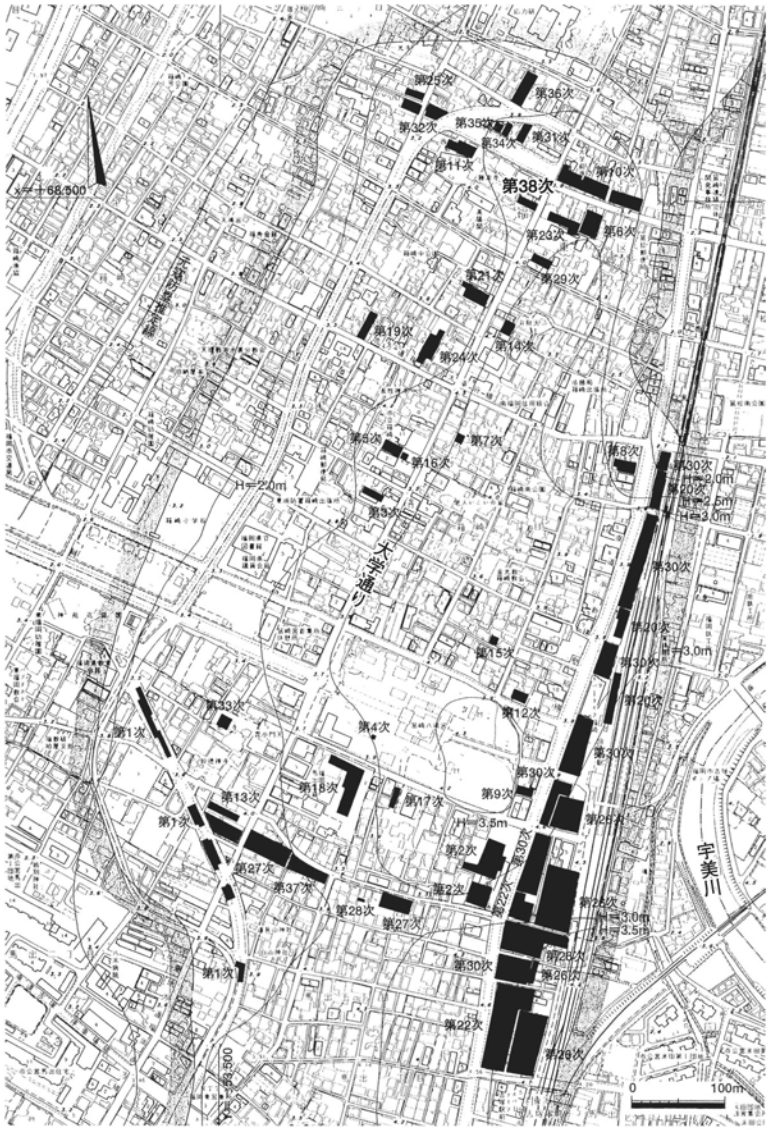


Fig.2　箱崎遺跡群の既住調査地点（1/10,000『箱崎12、14』に一部加筆）

Fig. 3　箱崎遺跡群38次調査地点（1/1,000）

Ⅱ．位置と環境

（箱崎遺跡群）

箱崎遺跡群は博多湾に沿って形成された砂丘上に立地する。同様に砂丘上に立地し中世都市として繁栄した博多遺跡群との間は1.5㎞の隔たりがある。

砂丘地形をもとに埋蔵文化財包蔵地として登録された箱崎遺跡群の規模は略南北長1.1㎞、東西約0.4㎞である。近年、事前審査の開発チェックが細かくなったこともあり調査の件数が増加しその様相も明らかになってきた。箱崎遺跡群の東側は宇美川の河口が北側の博多湾に向けて広がって流下し入江状に湾入した形状で遺跡を限っている。遺跡をのせた砂丘は南寄り中央部に位置した筥崎宮の標高４ｍ前後を最高所に、大学通りより東側に頂部を置き尾根線状にこの道路とほぼ平行し延びていくものと推定される。38次調査地点は遺跡群の北端近くに位置しこの尾根線状に延長した頂部より西側に下降した地点に占める。調査区で確認した地山砂丘の標高は2.5mを測るので、この頂部（10次調査では標高2.8mが確認されている）より30㎝以上低くなっている。

既往の調査

923年（延長元年）に現在の位置に遷座、創建された筥崎宮以後の文書関係により知られる箱崎の歴史については既

Ph.2　SX31焼土層断面（北から）

刊の報告書に記載されているので割愛するが、発掘調査で検出例が増加しつつある13世紀後半代の焼土からなる整地層は元寇との関係で注目される。今回の調査においても整地層とは判断できないが13世紀後半以降と考えられる焼土ブロックを多量に含むSX31が検出された。

また、現在の町並みと同方向の溝や建物跡が検出される例がある。近接した10次調査では現在の町並みに沿った方向の16世紀代と報告された２条の平行する溝が検出された。先述した箱崎遺跡群の中央部を北北東に走る通称大学通りをはじめ現況の道路や町並みは地山地形にほぼ合致し、前代の町並みを踏襲しているものが多いと思われる。

Ⅲ．調査の記録

1　調査の方法と概要

先述の通り、廃土置きの事情から調査区を半割し、西半（Ⅰ区）、東半（Ⅱ区）と称して調査・記録を行った。遺構検出は時間的な制約から地山の明黄褐色砂１面で行った。しかし、切合いが多く、井戸の掘方を切る遺構等先に主な遺構を掘り下げ図面、写真等を終了したのち、切られた遺構の調査にかかった。

検出された主な遺構は井戸５基、土壙約20基、建物跡２棟が検出され、時期は13世紀後半から14世紀代が多いが、出土遺物は12世紀、13世紀代の青磁、白磁も多い。なお、近世の遺構はほとんど地山面までは達しないものと考えられ、出土遺物は少ない。

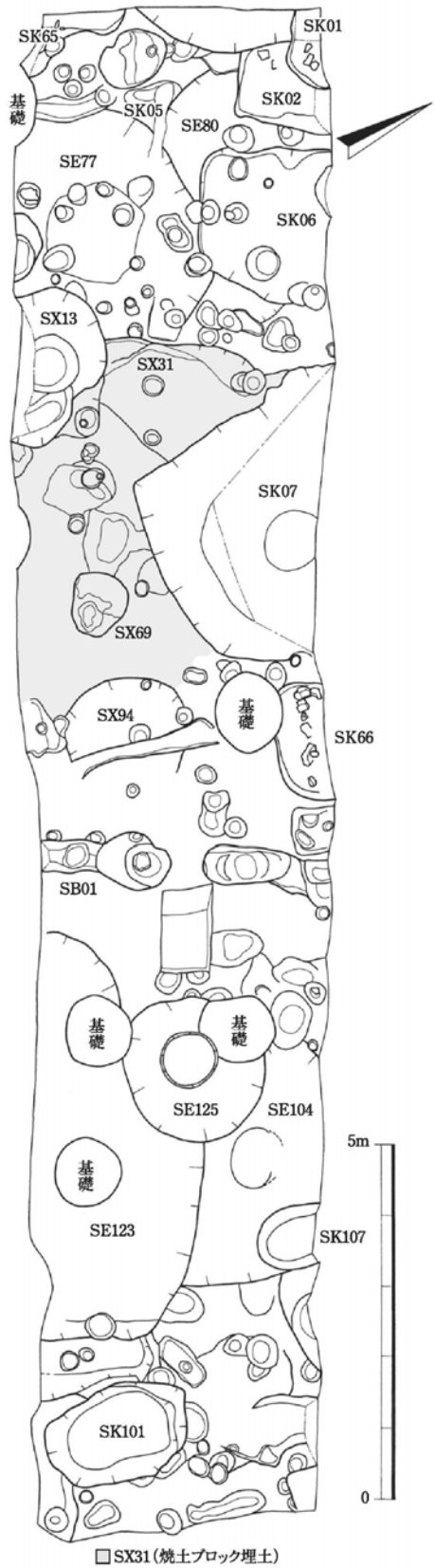


Fig. 4　遺構全体図（1/100）

2　基本層序

SE07が検出された調査区北壁の土層は比較的単純にみられる

Ph.3　調査区西半（Ⅰ区）全景（北西から）

Ph.4　調査区西半（Ⅰ区）全景（南東から）

Ph.5　調査区東半（Ⅱ区）全景（北西から）

（Ph. 5）。ここではGL.（標高3.76m）より－33㎝までが現代客土、－96㎝までが黄色砂混じり暗灰色砂、以下、層厚30㎝程の整地層とみられる水平堆積した暗灰色砂がみられ、－128㎝（標高2.48m）で地山の明黄色砂となる。

調査区内の地山の上面レベルはほぼ変わらず西端で標高2.53mを測り、中央部の焼土ブロックを多量に含むSX31から段落ちする。調査区東際では標高2.43mとなり西側との比高差は約10㎝で傾斜はほとんどみられない。箱崎遺跡群の砂丘地形からみると、調査地点周辺は西側から南西側の海側へ下降していくことが予想される。

SX31（Fig. 4 、Ph. 2 ）

調査区西よりのSE07付近から東へ延長約5.3mの範囲に大きな焼土ブロック、炭を多量に含む暗灰色土からなる落ち込みが認められた。調査区が限られる為にプランは不明である。この焼土ブロックからなる埋土の上面は標高2.63mからみられ、層厚40㎝を測る。西側の地山面との比高差は18㎝で起伏がある不整形な落ち込みである。東側の地山の立ち上がりはみられず、そのまま東側の地山レベルに続く。調査区西半（Ⅰ区）の表土剥ぎ時点で検出されたが、試掘成果と時間的制約から重機により埋土を掘り下げた。下底に黄色粘土、更にその下部である地山（黄色砂）との層界には極めて硬質になった褐鉄が沈着している。この黄色粘土、褐鉄は凹凸やうねりが見られ（Ph.2）、SX69付近の落ち込みには焼土を含む青灰砂土が埋まる。SX31の焼土ブロックの埋土からは遺物はほとんど出土せず、同安窯系青磁椀、土師器小皿などの小片の出土をみるにとどまる。

井戸（SE）

38次調査では井戸５基が検出されたが、調査区が狭く、また、矢板の深さが浅いために調査区際にのり面をつける必要が生じ、総て完掘することはできなかった。

SE07（Ph.6）

焼土ブロックを多く含むSX31を切って検出された。掘方の埋土は焼土ブロック混じりの黒褐色～褐色砂からなる。掘方の全体は不明であるが、１辺約3.2m前後の方形に近いプランとみられる。掘方の一部に幅13㎝のスコップ状掘具の痕跡が検出された。遺構の掘り下げは地山面から180㎝下げたレベル（標高0.6ｍ）で止めた。中央部には検出時から80～90㎝の楕円形に変形した井筒内の土質の違いを検出していた。しかし、井筒の木質が遺存するレベルまで掘り下げることはできなかった。

出土遺物（Fig.５・６）

出土遺物量は深さ10㎝のコンテナに3箱程である。その内に磁器の半箱を含む。１は白磁、２、３は青白磁の合子である。１は櫛目の蓮弁、２は花文の型押し。２の遺存する外面は露胎、３の内面は無釉である。４は青磁坏である。内面に蓮弁状の起伏がみられるが、小片でその形状は不明確である。5は外面に鎬蓮弁、内面見込みに双魚の貼付け文が施された青磁坏である。６は内面見込みに文様が刻まれている（片彫か）。７～９は白磁椀で、８、９は口ハゲ。９の外面下位は施釉されず（拭き取りか）、口唇部とともに褐色を呈している。10の天目は口縁部が褐色、以下、黒色に近い濃紺色を呈す。11～14は陶器壷である。11の薄い釉は外面褐色、内面灰色に発色する。12の内外面は暗灰色を呈す。13の耳より上位に２条の沈線が施される。外面褐色、口縁部上面から内面にかけては薄い釉が灰白色を呈している。14は内外面に褐色の釉が施されている。15は無釉の鉢である。16～19は黄灰色の釉が施された陶器盤の口縁部である。16の外面は無釉で灰色を呈す。内面は施釉されるが口縁部は拭き取られている。17の外面には拭き取りや掻き取られなかった口縁部の一部とその下位2.3㎝幅に帯状の厚い黄灰色釉が残る。内面の遺存部分は口縁端部以外は施釉。18は断面方形の口縁端部以外の内外面に施釉されている。口縁端部の釉は拭き取られている。口縁端部上面から内面にかけて白色の目跡が残る。19は小片のため図示した傾きには誤差がある。外面は無釉、内面は釉が施されるが、鍔状の口縁部は拭き取られている。20は甕口縁部は緑黄色の施釉が内外面にされているが、外面は薄い。内側に張り出した口縁部の釉は外面を拭き取られ、内面は垂下した釉が残る。21、22は内面底部に褐釉の施文がある。外面は無釉で、底部の器厚は薄い。23の外面は体部上位に緑釉が施され、下位から底部は無釉で淡黒褐色を呈す。内面は体部に緑釉、底部に褐釉を施した２彩である。体部と底部の境に２条の沈線が巡る。24～33の底部は24、25、26、28、29が盤の底部で他は甕、壷、鉢類の陶器である。24は内面に緑黄色の釉が斑にみられ、外面無釉で暗赤褐色を呈す。25は外面無釉で黒灰色を呈す。内面に白濁した黄灰色の釉が施される。26は内面に空色のガラス化した施釉がなされ、外面は無釉で、体部は明褐色を呈す。27は外面に薄い暗褐色の釉を施し、内面は無釉。遺存する底部は３㎜と極めて薄い。28は26と近似するが、内面の釉は緑黄灰色に発色している。29は内面体部に白色に発色した釉が施されている。外面は無釉であるが、体部に化粧土がかけられ、滑らかな器面である。30は甕底部か。内外面無釉で底部近くに黄灰色の釉が部分的に付着している。31は甕底部か。外面体部に垂下した黄灰色の釉がみられる。内面無釉。火熱を受け劣化が著しい。32は鉢底部か。無釉で外面にタテハケ、内面にヨコハケが施されている。33も体部の開きが大きく鉢の可能性がある。内面に劣化した黄灰色の釉が斑にみられる。外面無釉で赤褐色を呈す。34の土師Ⅲは復元口径9.0㎝を測る。遺存する外底部に板目は無い。35は復元口径10.3㎝。底部にわずかな丸みがあり、外底部に板目を残す。36、37は土錘。38は東播系の鉢。39は土師質であるが、胎土は砂

Ph.6　SE07検出（南から）

粒をほとんど含まず、硬質である。黄灰色を呈し、内面はススが付着していたためか黒変している。40、41は瓦質の鉢である。40は斜位のハケ目、41は粗い斜位から横位のハケ目が施され、下位は敲打痕とみられ、あばた状になっている。42は土師質の甕口縁部である。外面にススが付着する。43は石鍋、44は粘板岩製の砥石である。45は径3.7㎝、高さ1.9㎝、器厚2.5㎜の椀形の完形銅製品である。底部中央に径２㎜の穿孔がみられる。外面に褐色の木質が付着している。用途は不明。図化していないがこの他に陶器片が最も多いが鎬蓮弁の青磁椀、白磁椀、常滑甕なども出土した。これらの遺物から13世紀後半から14世紀初頭の時期に下限をおくことができる。

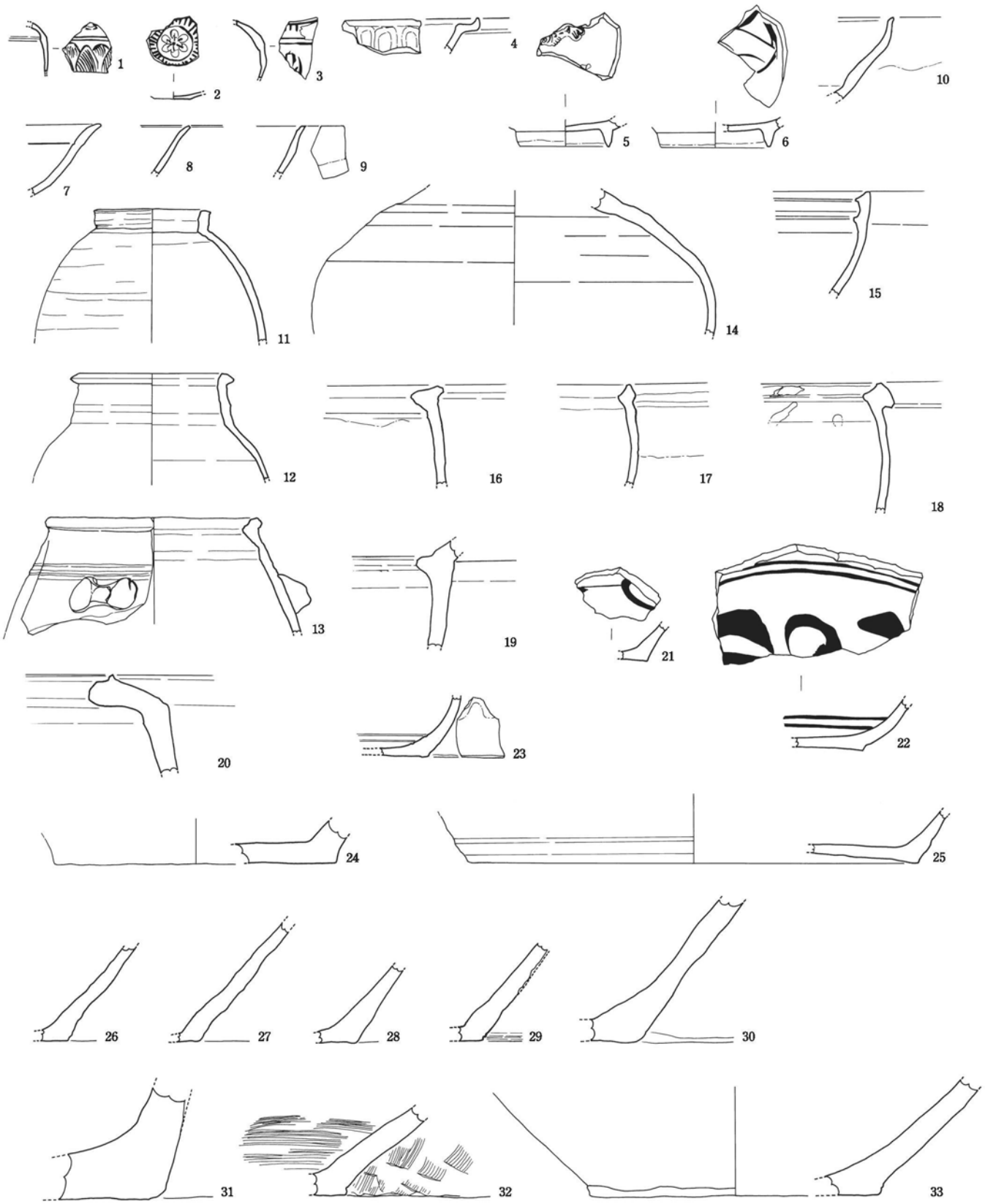


Fig. 5　SE07出土遺物実測図 1 （1/3）

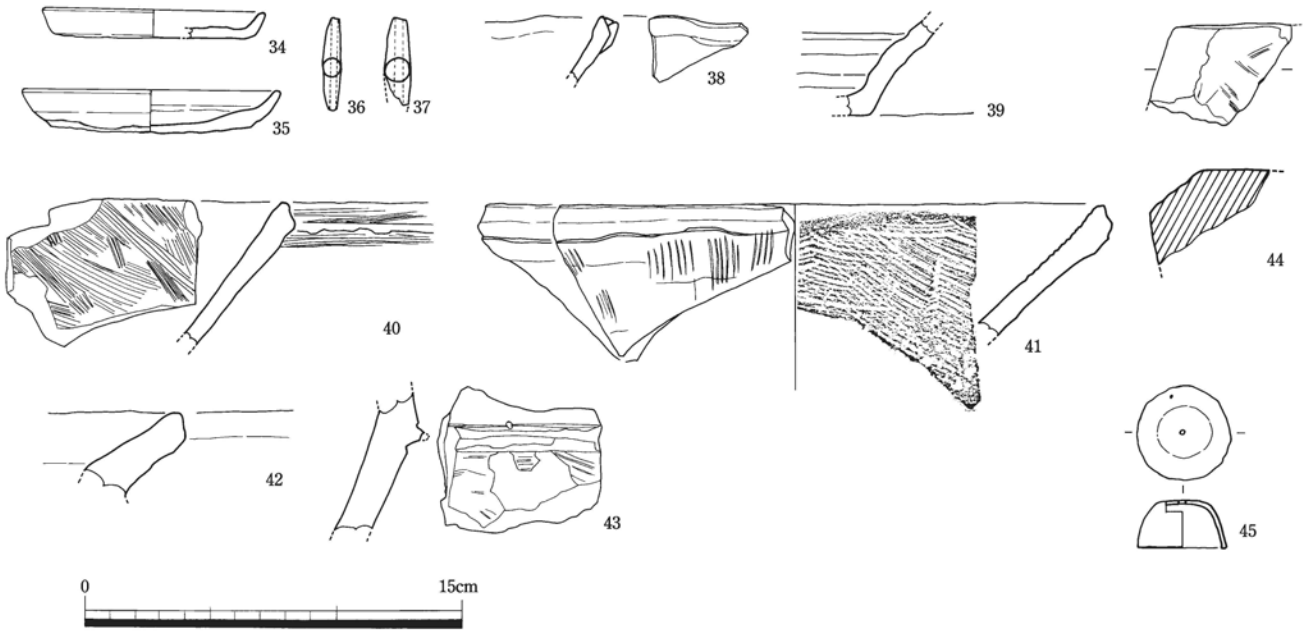


Fig. 6　SE07出土遺物実測図２（1/3）

SE77、80（Fig.7、Ph.7）

調査区の西半部（Ⅰ区）の柱穴等切っている遺構の調査を終了した後に掘り下げた。SE77、80の埋土上層は地山の黄灰色砂に混じりがある土で地山の明黄灰色砂埋土のSE80を切っているものと判断されたが、下部ではともに地山の明黄灰色砂に近いものとなり、区別が困難となった。また、掘方は当初の検出時では方形に近いプランとみられたが、下層埋土の黄灰色砂が広がり径3.6mの円形に近いプランとなった。深さは可能な140㎝まで掘り下げた。井筒は径90㎝の木質を検出したが、構造は不明である。SE80は深さ120㎝まで一部掘り下げたが、調査区際にのり面をつける必要から調査範囲が限られ井筒を検出することはできなかった。

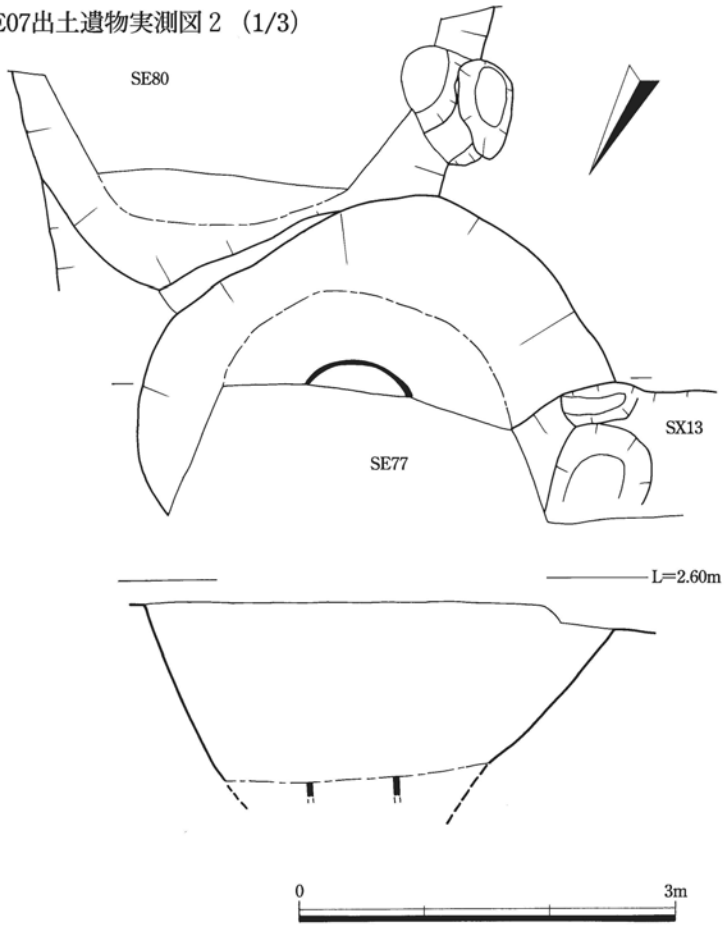


Fig. 7　SE77、80実測図（1/60）

SE77出土遺物

出土遺物量は深さ10㎝のコンテナに１箱弱である。46～50は土師皿で、46、48は小片の為、口径に誤差を生じている可能性がある。46は赤褐色を呈し、上げ底となった底部中央は器厚1.3㎜と薄い。48も器厚は薄く、褐色を呈す。51、52は土師器坏、外底部に板目を残す。53は白磁皿である。口縁端部は輪花、内面に太線と細線を組み合わせた花弁状の印文が施されている。54の白磁皿は火熱を受け、釉が溶解、白濁している。55白磁椀の高台内に花押状の墨書が施されて

Ph.7　SE77完掘状況（北東から）

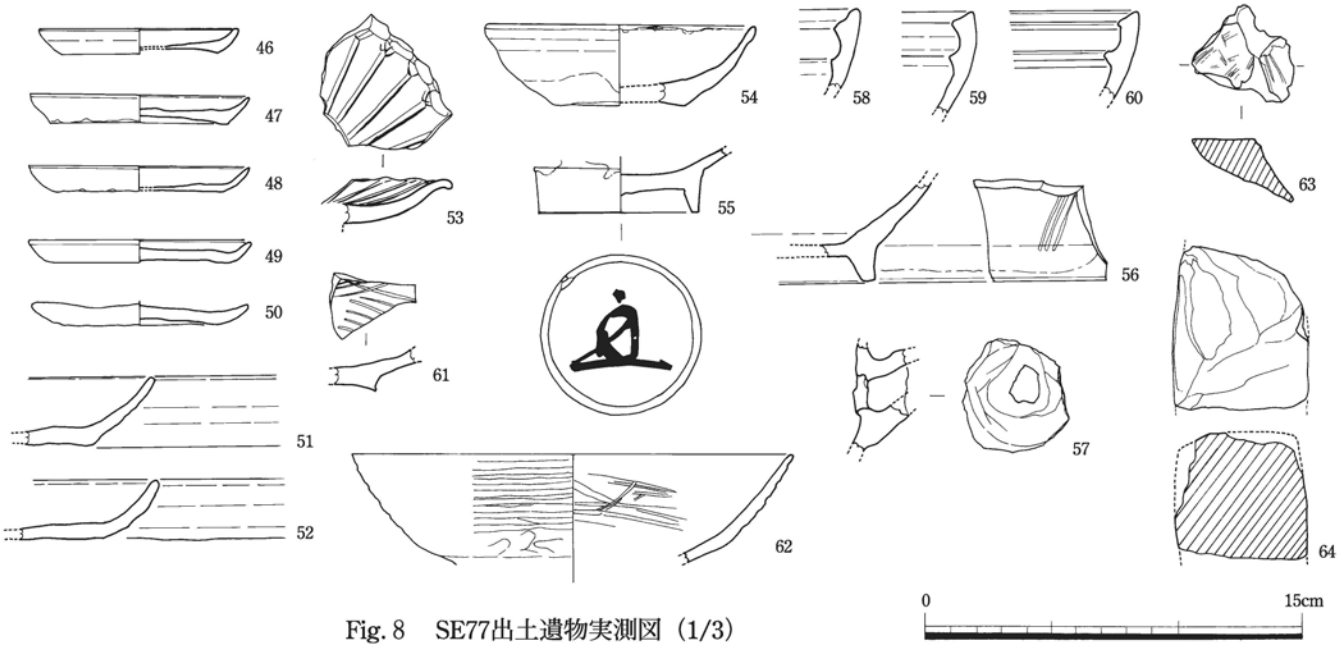


Fig. 8　SE77出土遺物実測図（1/3）

いる。56の白磁椀は外面に櫛歯文が施され、高台付近まで厚く施釉されている。高台には畳付まで薄い釉がかかり、褐色を呈す。57は褐釉陶器の注口である。58～60は見かけ上内側へ２条の張り出しがつく陶器鉢である。遺存部分はいずれも無釉である。61は陶器摺鉢である。外底部は赤褐色、

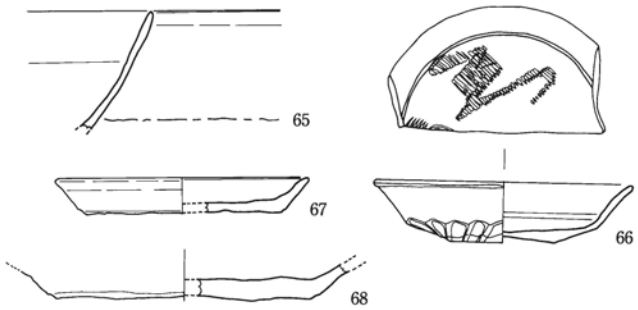


Fig. 9　SK20（SE77上部）　出土遺物実測図（1/3）

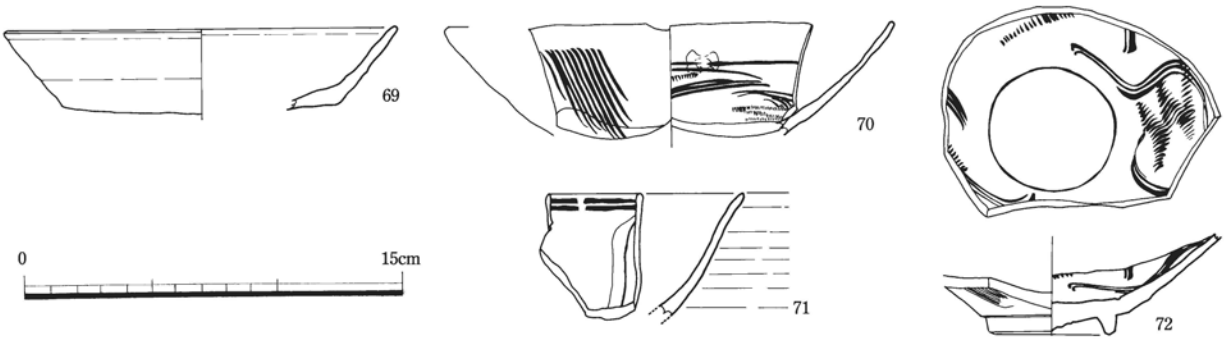


Fig.10　SX78（SE77周辺）出土遺物実測図（1/3）

他は黒褐色を呈す。62の瓦器椀は外面の体部上位に沈線状の起伏がみられる。63は砂岩製砥石。64は炉壁の一部と思われる。器胎にスサの空隙や赤色粒がみられ、器厚は5.2㎝を測る。Fig. 9 の65から68は井筒部分の埋土上位から出土した。65は白磁椀。内面の体部中位に沈線がめぐる。外面体部下位には施釉しない。66の同安窯系青磁皿は火熱を受け灰色を呈し、小さな発泡が顕著である。外面下位に成形時にヘラが当たって生じた連続する刻みが残る。67は土師皿、68は土師器坏。その他井筒埋土上層から「祥符元寶」の銅銭（Fig.23）が１枚出土。以上の図示した遺物を含め出土遺物の時期は53が後出的である他は下限が13世紀後半に収るものと思われる。

SE77周辺出土遺物

Fig.10はSE77の掘り下げ中に、SE77とその周辺から出土した遺物である。69は土師器坏。70、72は同安窯系青磁。71は緑黄灰色に発色した青磁椀である。内面に２条の断続した横線と片彫りが一部みられる。

SE80出土遺物

出土量は深さ10㎝のコンテナ１箱弱である。白磁も青磁に比べ若干少ない程度で、玉縁の白磁椀を含め出土量は多い。青磁は図示した遺物のほか鎬蓮弁を施した椀を含むが細弁は無い。

73は内面見込に魚文を片彫りした龍泉窯系青磁皿である。74は低い高台、薄い器厚の白磁小椀である。外面体部に櫛歯文を施し、高台から底部にかけては施釉しない。内面見込みは輪状に釉を掻き取る。外面高台内に墨書がみられる。75は白磁椀、76は口ハゲの白磁椀である。77は白磁（皿）である。外面の口縁端部以外は露胎である。78は陶器耳壷である。内面下位には施釉しない。釉は

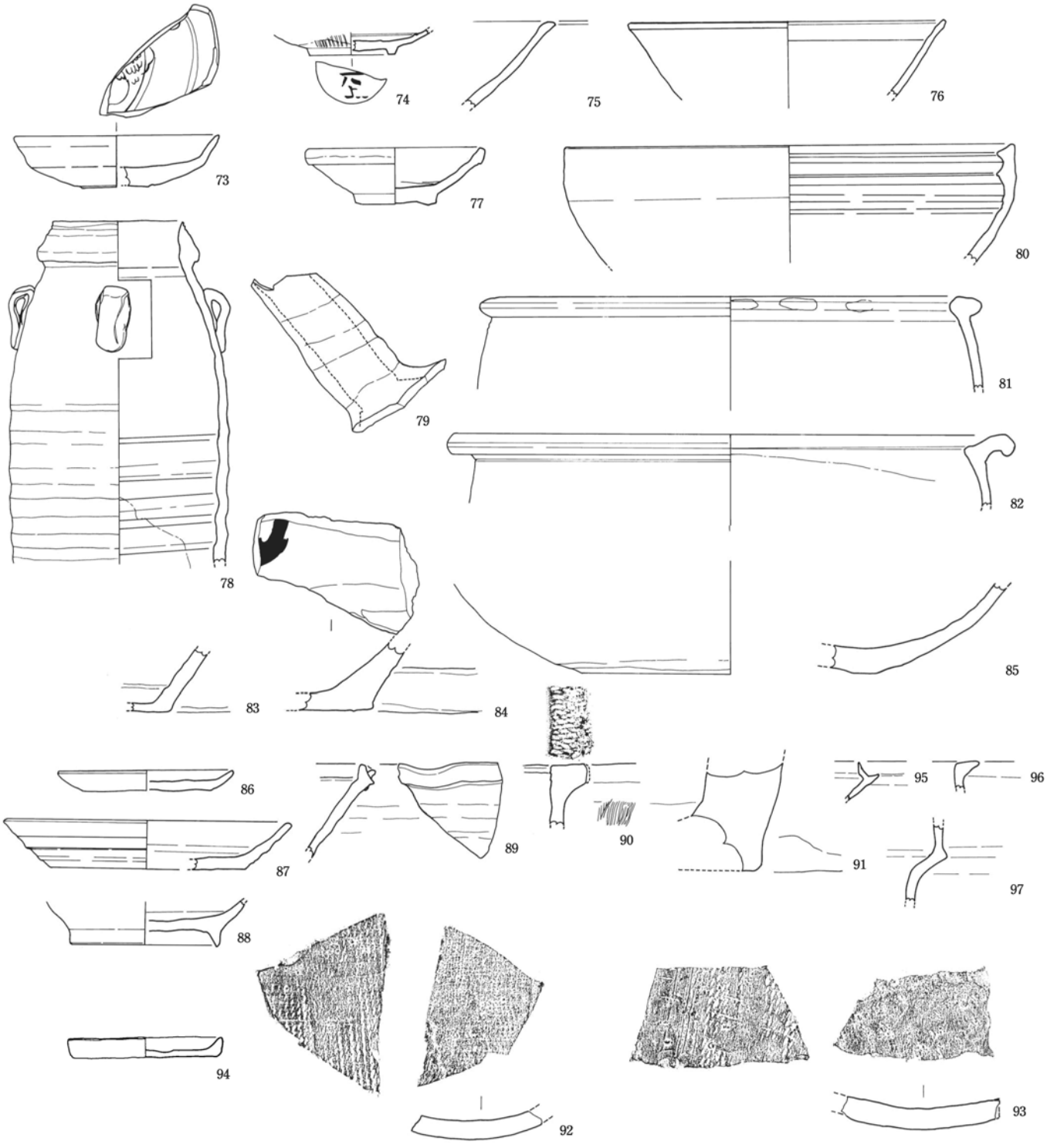


Fig.11　SE80出土遺物実測図（1/3）

暗緑灰色に発色する。79は陶器の注口である。赤みを帯びた暗褐色を呈す。80の陶器鉢は無釉である。81は陶器壷もしくは鉢である。内側に張り出した口縁端部に目跡が残る。82は釉が黄灰色を呈す陶器盤である。口縁部上面から内面の口縁下一部まで釉が拭き取られている。83は底部の一部のほか内面体部に横位の帯状に残る白濁した釉がみられる。84の盤底部には内面体部の（緑）黄灰に発色した器面に褐釉の文様（鉄絵）が描かれる。85は甕底部か。内外面無釉。胎土に白色砂粒を多く含み粗い。86は口径9.0㎝の土師皿、87は復元口径14.8㎝の土師器坏、88は土師器椀である。89は東播系須恵器鉢である。90は土師質の鍋である。外面体部にタテハケ、口縁部上部に縄目を残す。91は土師質の底部である。火熱を受け外面にススが付着している。器胎は厚く、体部は4.0㎝を測る。92、93の瓦は凸面に縄目、凹面布目を残すがナデやヨコナデによって不明瞭になっている部分がある。94の土師皿は口径8.0㎝を測り体部が鋭角に立ち上がる。後出的であるが、同タイプはこれを含め2個体ほどの出土数である。95～97は前代の遺物であるが、箱崎の砂丘上に集落を形成した時期を示唆するものである。95は古墳後期の須恵器坏身、96は摩耗が著しいが、弥生土器の可能性がある。97は複合口縁壷である。図示したものを含め出土遺物は94が後出的である他は、下限が13世紀後半～14世紀初頭までに収ると思われる。

SE123（Ph.8）

調査区東半（Ⅱ区）で検出された。当初、現代まで続く瓦組井筒のSE125や基礎等に切られ、そのプランは不明確であった。しかし、隣接したSE104を掘り下げていく途中において、明黄灰色砂埋土のSE104を切る略方形状のプランが検出された。発掘は検出面から170㎝下げたレベルまで掘り下げたが、調査範囲が限られ、井筒の検出はできなかった。

出土遺物（Fig.12）

出土遺物量は深さ10㎝のコンテナに1箱弱である。

95は白磁合子である。内面見込みに3弁が組みになった花弁を型押し。96の白磁皿は口縁端部（口ハゲ）と底部の釉を掻き取る。97は陶器小鉢である。外面は緑黄色～褐色を呈す。口縁端部に重ね焼きの付着と剥落がみられる。98は陶器鉢、99は褐釉陶器壷、100の陶器壷の釉は明黄褐色を呈し、内面は白濁する。101の耳壷は外面体部に1条の沈線を有す。102は屈曲して肩が張り出すタイプの陶器壷頸部である。口縁部から頸部にかけて内外面の黄灰色釉は拭き取られている。103は鉄絵を施した盤である。104は土師器坏、105は灰白色を呈した軟質の須恵器鉢である。以上の図示した遺物も含め出土遺物の下限は13世紀後半から14世紀初頭位に収ると考える。

SE104（Ph.9）

調査区東半（Ⅱ区）で前出のSE123に切られて検出された。埋土の上層は暗褐色砂で当初、SE123を切っているものと判断したが、中層以下、地山の黄灰色砂に近い埋土となり、SE123が切っていることが明確となった。掘り下げは検出面から100㎝下げたレベル（標高1.4m）で井筒の木質を検出し、さらに井筒内を掘り下げ、桶組を確認した。桶組み井筒は径56㎝、1枚の板幅12.3㎝、遺存長60㎝の1段分が検出できた。掘方のプランは調査区が限られ、他の遺構から切られていることから不明確であるが、井筒の位置や検出できた掘方上端から径3.7mの円形もしくは同規模の略方形プランと考えられる。

出土遺物（Fig.13）

出土遺物量は深さ10㎝のコンテナに1箱分である。106は黒褐色、107は明黄白色、108は赤褐色を呈した土師皿である。外底部の板目は108に若干残る程度で他は無い。109は口ハゲの白磁皿。110、111は土師器坏。112は青白磁の合子である。口縁端部から内面体部にかけては釉を施さない。113は

Ph.8　SE123検出状況（北東から）

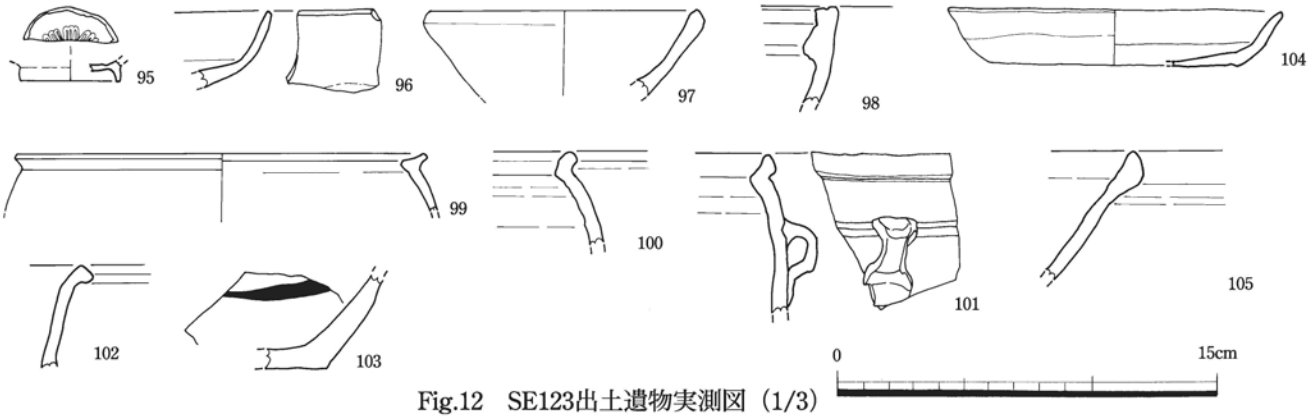


Fig.12　SE123出土遺物実測図（1/3）

白磁の蓋で内面無釉。114は白色の釉が厚く施されている。115の龍泉窯系青磁椀は高台畳付の釉が掻き取られる。116の内面見込みは輪状に釉が掻き取られ、目跡が帯状に付着する。中央部の施釉部分は小さな発泡が著しい。117、118の陶器鉢は無釉。119の褐釉陶器壷は口縁上面から頸部外面にかけて施釉される。120の摺鉢は屈曲し肥厚した口縁部に赤褐色に発色した釉が施されるが、他も同様の色調である。121陶器壷は外面光沢のない黒灰色、内面赤褐色を呈す。122、123は須恵質の鉢で、123の胎土は砂質で脆弱になっている。124は須恵器甕、125、126は土師質の鍋で126の口縁部上面には縄目が残る。127は土錘片。以上の図示した遺物をはじめ出土遺物の時期の下限は切合うSE123に

Ph.9　SE104検出状況（北東から）

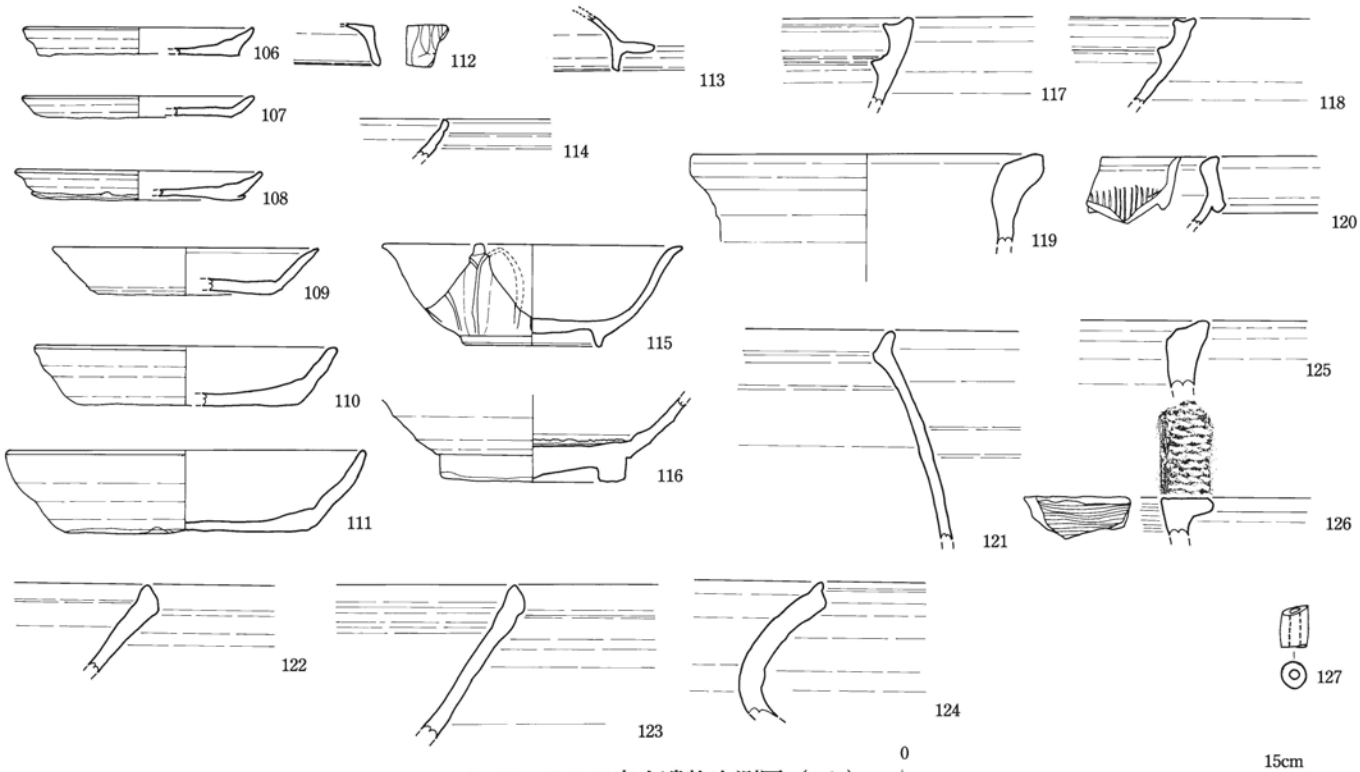


Fig.13　SE104出土遺物実測図（1/3）

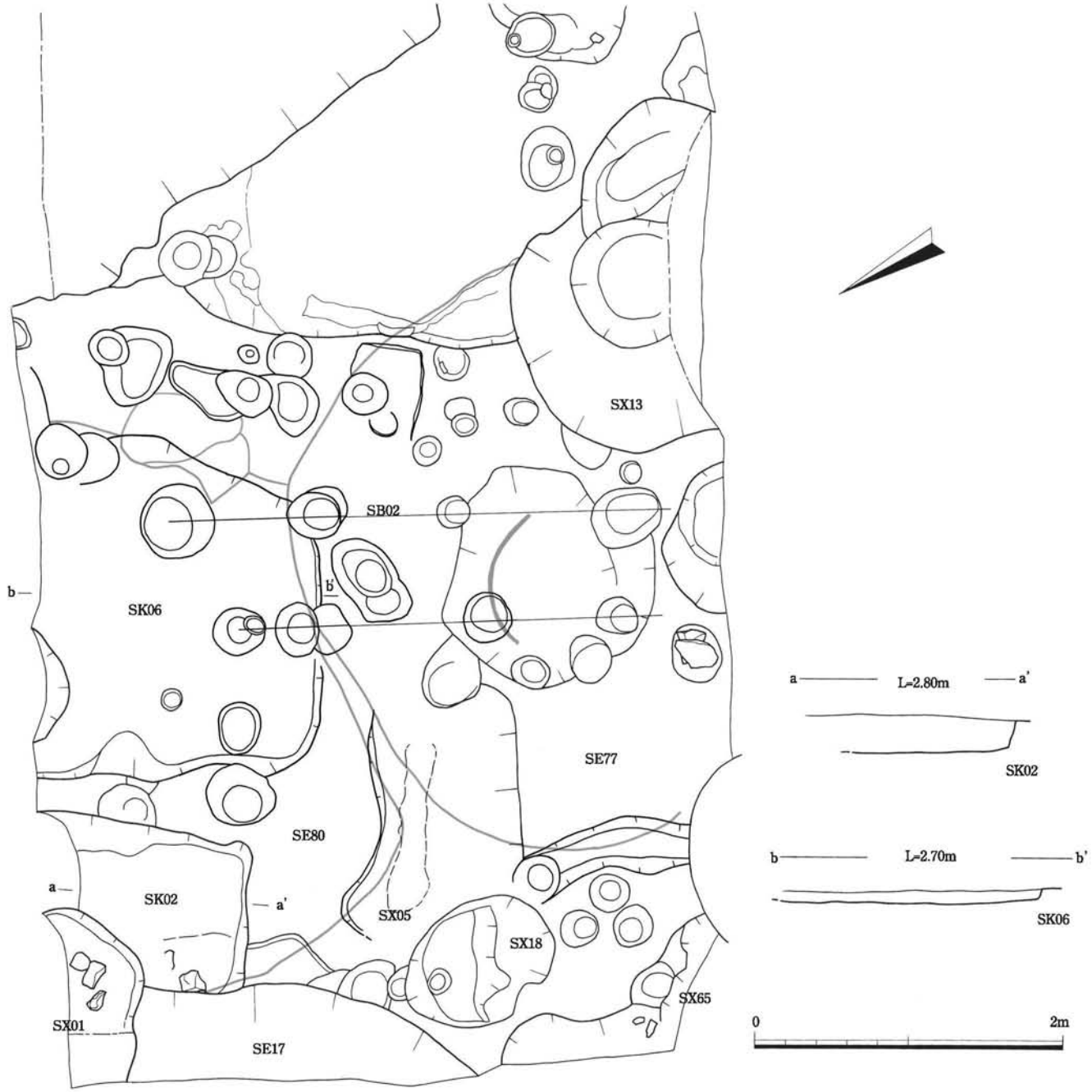


Fig.14　調査区西半（Ⅰ区）　遺構配置図（1/40）

近く、13世紀後半から14世紀初頭に収ると考える。

土壙（SK、SX）

検出された主な土壙は約20基に及ぶが、プランが比較的整然とした主な遺構12基について記す。

SK02（Fig.14、15）　調査区西際でSK01、（SE）17に切られて検出された。方形プランと思われるが、その規模は不明。深さ20㎝、埋土は地山の明黄褐色砂を含む暗灰色砂。

出土遺物は小片50点ほどである。128は白磁小椀で内面見込みに花弁を型押し。129は白磁椀。130は口ハゲの白磁椀。131は陶器盤の口縁部。部分的に黄灰色の釉が残る。

SK05（Fig.14、15）　検出時に新しい時期と思われる黒青灰粘土混じりの土が埋土となった円形プ

Ph.10　調査区西半（Ⅰ区）検出（北西から）

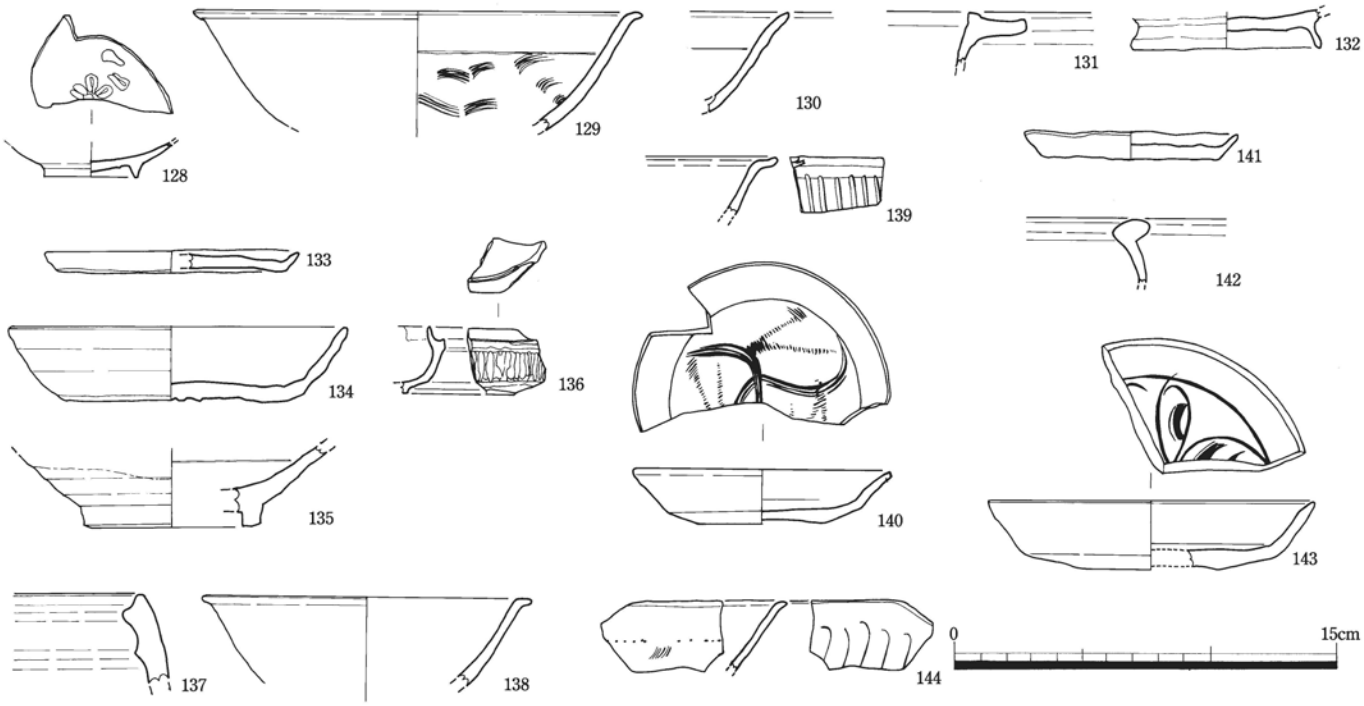


Fig.15　土壙出土遺物実測図（1/3）

Ph.11　SX13遺物出土状況（北東から）

ランの土壙であった。下部は別の遺構と考えられる焼土や炭を含む落ち込みが検出された。出土遺物は小片50点程である。133は土師皿、134は土師器坏。135の白磁椀は内面見込みの釉を掻き取る。136は白磁合子。体部は多角形で外面に簾子状の型押しを有す。

SK06（Fig.14、15）　調査区西際で検出された。方形プランと考えられ、検出された短辺は1.7mを測る。深さは10㎝、埋土は均質な明褐色砂からなる。柱穴に切られている。出土遺物は小片40点程である。132は土師器椀である。137、138はSK06を含む周辺からの出土遺物である。137は陶器鉢、138白磁椀。

SK18（Fig.14、15）　短径77㎝、長径103㎝の楕円形プランを呈す。深さは20㎝程度で下底に段があり別遺構が切合っていたものと思われる。出土遺物の141は土師皿、142は褐釉陶器、143は龍泉窯系青磁皿。

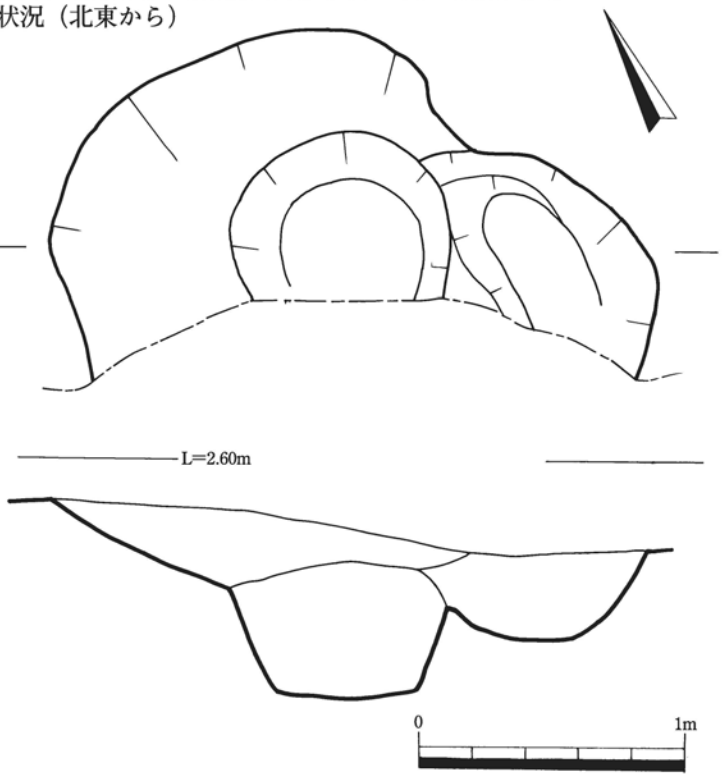


Fig.16　SX13実測図（1/40）

SX43（Fig.14、15）　SE77上層埋土か。出土遺物の144は白磁椀。

SK65（Fig.14、15）　南西隅で検出されたが、調査区が限られ大半が未掘である。出土遺物の139、140は同安窯系青磁である。

SX13（FIg.16～18、Ph.11）

調査区西よりでSE77を切って検出された。径230㎝の円形プランを呈し、中央に径85㎝の円形プランの落ち込みが検出され２段の掘方になっていた。遺物は上層から、下部の落ち込みまで多くの遺物が出土し、下部落ち込みの遺物には上層出土遺物と同一個体の破片を含むことからも一体の遺構と考えられる。深さは２段目の上端までが検出面から約20㎝、さらに下底まで50㎝を測る。

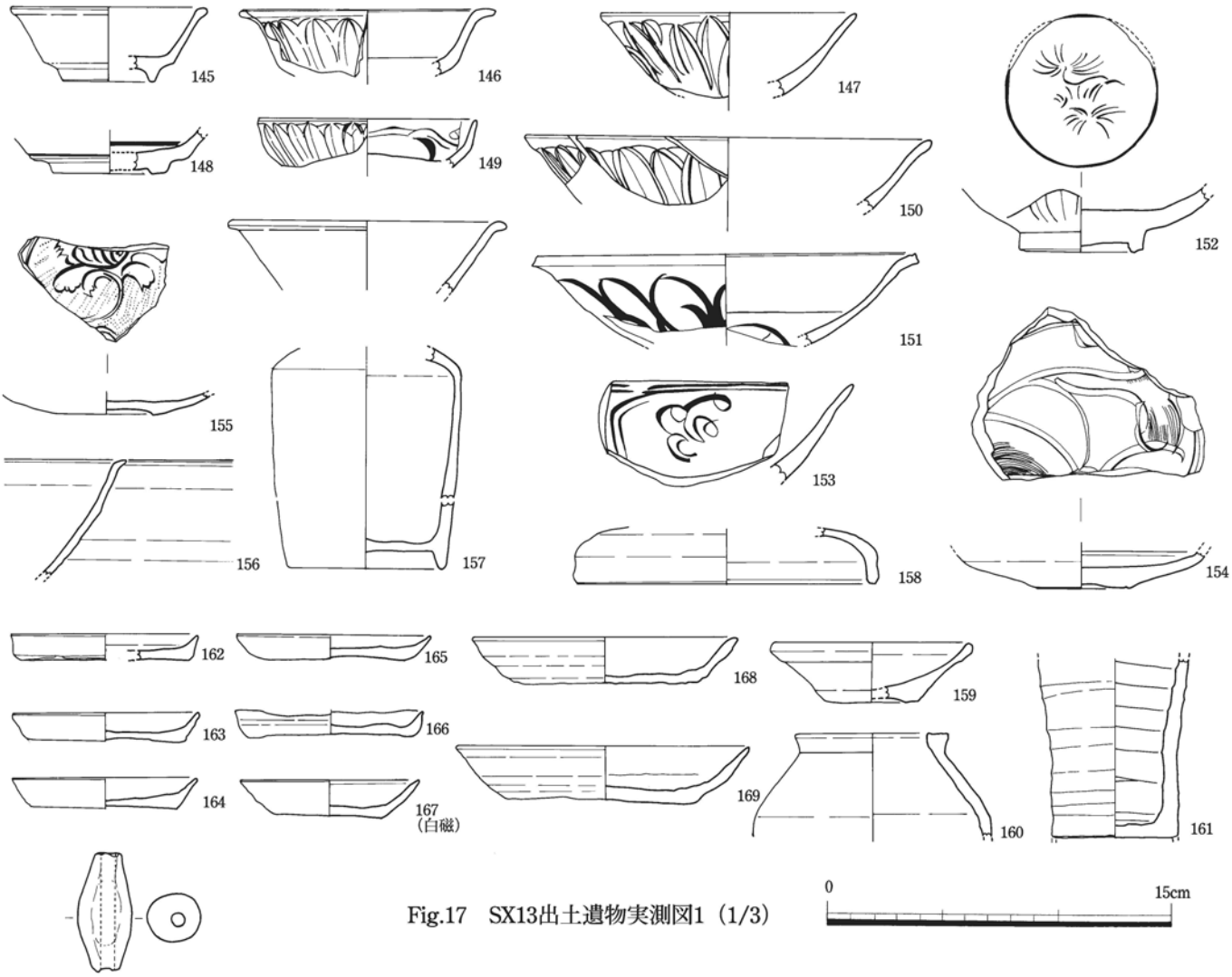


Fig.17　SX13出土遺物実測図1（1/3）

出土遺物（Fig.17、18）

深さ10㎝のコンテナに3箱分が出土した。145、146は龍泉窯系の青磁坏、147は龍泉窯系の青磁小椀。148の白磁坏は底部と体部の境に明瞭な屈曲を有す。149は細い鎬蓮弁を有す龍泉窯系青磁の小椀である。150も龍泉窯系青磁の細い鎬蓮弁を有した椀である。151は浅い椀形で外面体部に幅広い鎬のない蓮弁を2段片彫りする。内面は中位に圏線が巡り、以下片彫りの文様を有す。釉は空色に近い青白磁の発色である。肥厚し面取された口縁端部の釉は削り取られ口ハゲになっている。152は内面見込みに花文を有した龍泉窯系青磁である。153、154は龍泉窯系青磁。155の白磁は内底部に花文の片彫りと櫛歯の列点文を有す。上げ底となった外底部の釉は削り取られる。156は白磁椀。157の青磁壷（龍泉窯か）は火熱を受け釉が劣化白濁している。158の青磁蓋口縁端部は面取され釉が削り取られている。159は褐釉陶器の小鉢である。外底部以外に薄く施釉されるが、外面口縁部のみに光沢がみられる。160は陶器壷、161の長胴の陶器は外面体部に光沢のない薄い黄灰色の施釉がみられる。162～166は土師皿、167は白磁皿で全面に施釉されるが、火熱を受け剥落劣化が著しい。口縁端部の内面は釉が掻き取られ口ハゲとなっている。168、169は土師器坏。170は白磁水注の取手。171は白磁耳壷、172は褐釉陶器耳壷、173は陶器甕口縁部、174の陶器壷は全面に緑黄灰色の釉が施される。175には白濁し劣化した釉が残る。176の褐釉陶器内面は平行文の当具痕の上にタテハケが残る。177陶器盤の施釉された内面は黄褐色を呈す。178陶器甕の外面は底部近くまで黄灰色の釉が

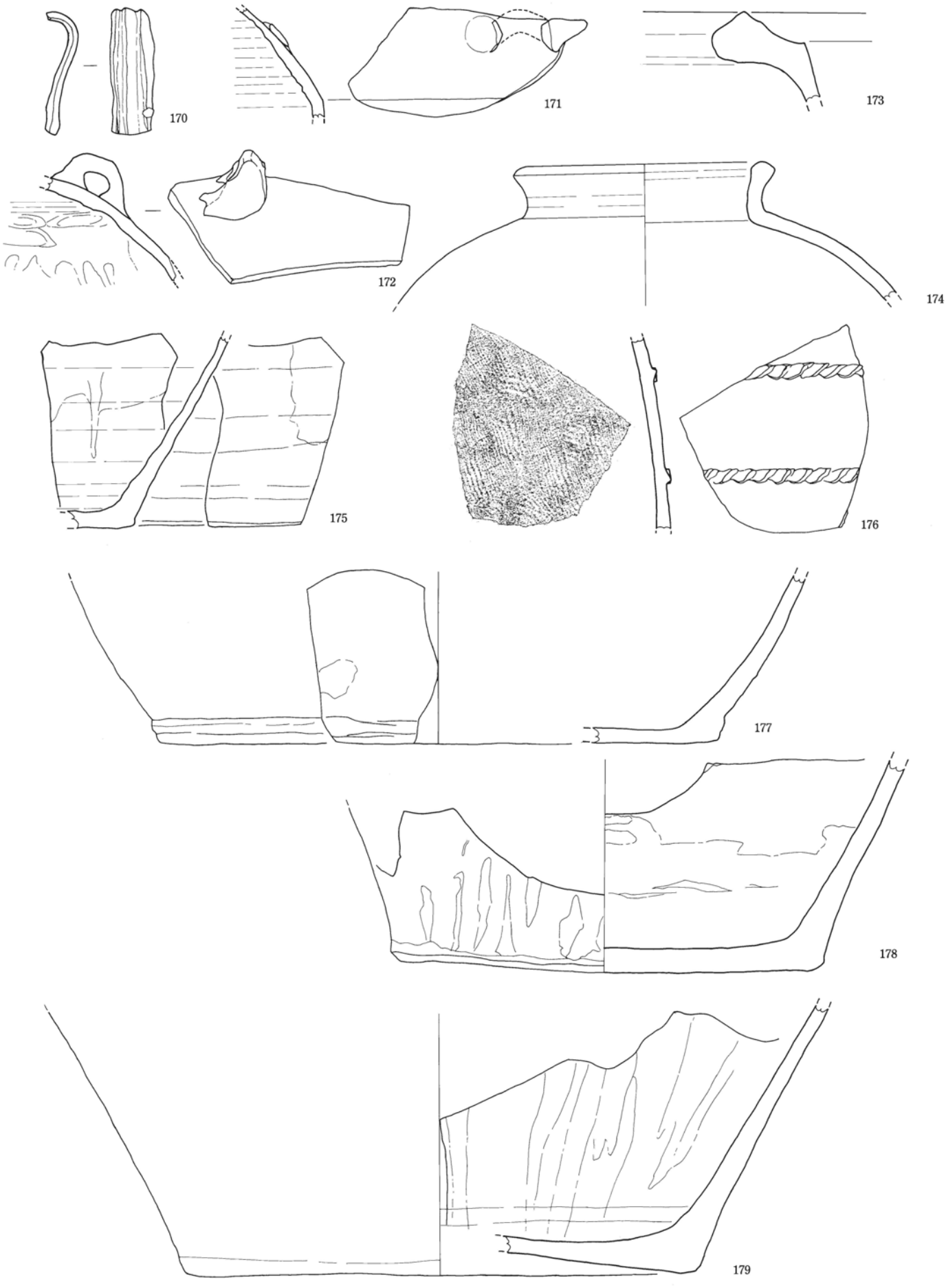


Fig.18　SX13出土遺物実測図2（1/3）

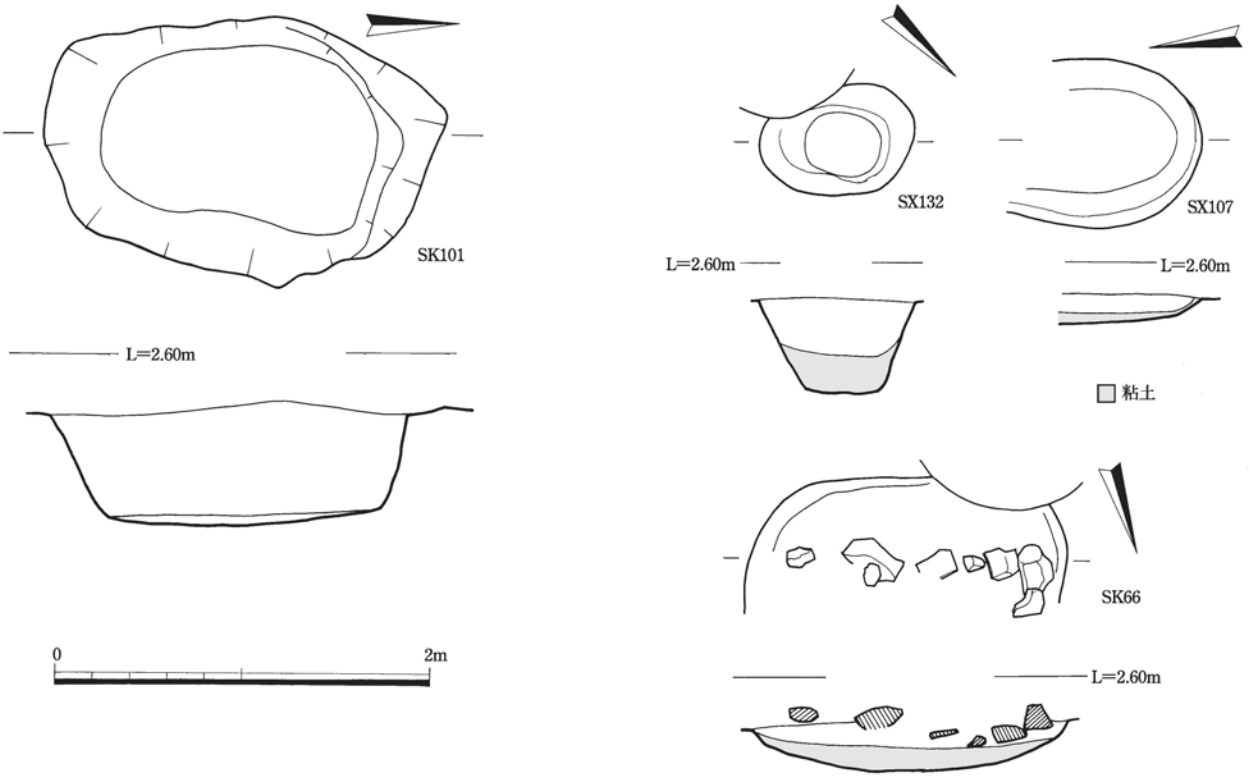


Fig.19　SK101、132、107、66実測図（1/40）

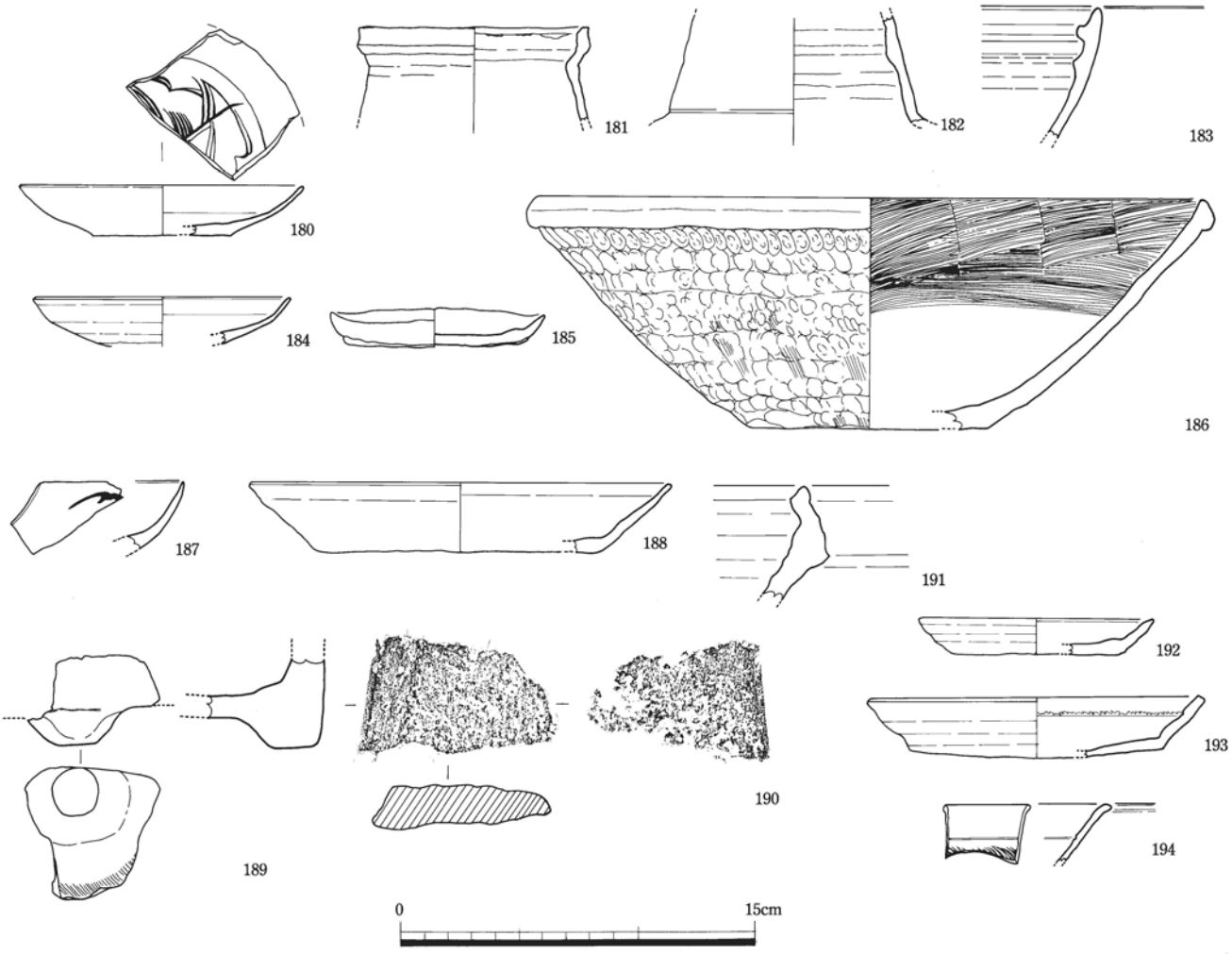


Fig.20　土壙出土遺物実測図（1/3）

Ph.12　SB01完掘状況（北東から）

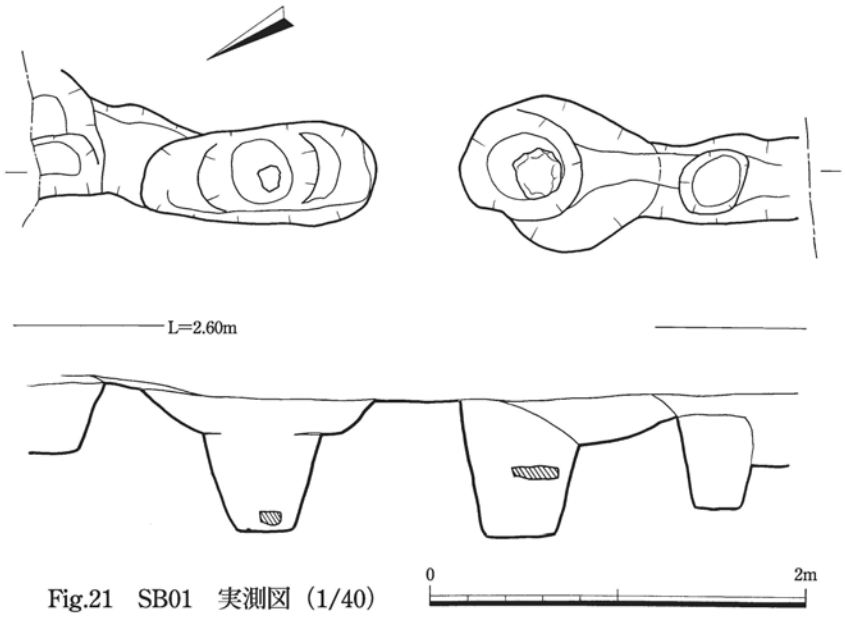


Fig.21　SB01　実測図（1/40）

垂下し、内面体部下位から底部は白濁した釉が拭き取られている。179陶器甕の外面は底部を除き白濁した黄灰色の施釉がみられ、内面の釉は底部まで垂下している。胎土は赤褐色を呈す。以上、図示した遺物中には細弁の龍泉窯系青磁や土師皿の形態等にみられるように今回の調査で出土した他の遺物と比較すると後出的なものがある。時期は14世紀を降る。

SK101（Fig.19）　調査区東際（Ⅱ区）で切合いが少なく明確なプランで検出された。長軸長200㎝、最大幅135㎝を測り、北側がやや幅広い略長方形プランである。検出面からの深さは74㎝を測る。

出土遺物（Fig.20）　180は白磁皿、181、182は同一個体のガラス坩堝。水注の転用と考えられ、内外面火熱を受けて外面の釉は剥落、内面は口縁部に白濁したガラス滓が付着し、頸部にオリーブ色の釉が一部残る。183は陶器鉢、184は黄灰色を呈した白磁皿。185は土師皿。186は瓦質の鉢で、外面は指頭痕を明瞭に残し、内面は上位が黒灰色を呈し、ヨコハケを明瞭に残すが、下位は摩耗している。

SK66（Fig.19）　調査区中央の北壁際で検出された。長軸長170㎝を測り、下底に12㎝厚の粘土を貼っている。粘土上には礫が並んだ状態で出土した。出土遺物の187は染付椀、188は土師器坏、189は火鉢底部か。淡赤褐色を呈し、硬質。190平瓦の凹凸面の調整は摩耗し不明瞭。

SX132（Fig.19）　調査区中央の北壁際で検出された。SE104の掘方を切る。長径85㎝の楕円形プランを呈す。下底に厚さ27㎝の粘土を貼り、検出面から粘土下底までの深さは35㎝を測る。出土遺物の191は備前擂鉢である。

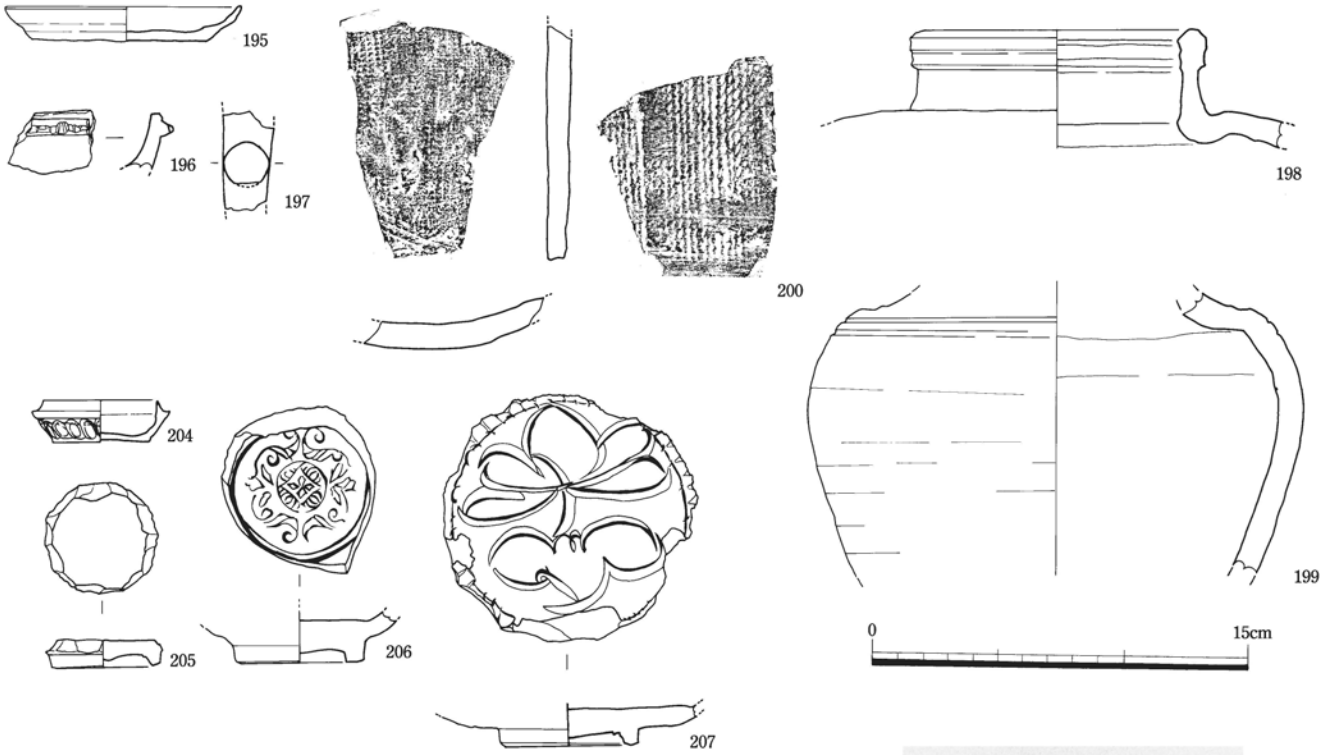


Fig.22　柱穴、表土出土遺物実測図（1/3）

Fig.23　出土銅銭（1/1）

Ph.13　SX13出土鹿角

SX107（Fig.19）　SX132に近接した位置で検出された。短径85㎝の楕円形に近いプランと思われ、SX132同様に下底に粘土を貼る。粘土は中央に向かってレンズ状に厚くなり、中央部で７㎝厚を測る。出土遺物は少量であるが、太観通寶（初鋳1107年）（Fig.23）破片202が１枚出土。

SX94　反転した調査区Ⅰ区とⅡ区の境で検出され、完掘できなかった。径185㎝、深さ60㎝以上。出土遺物の192は土師皿、193は土師器坏。194は白磁椀。

建物跡

柱穴は多く検出されたが、調査区が限られ、建物跡として完結した構造を判別できたものはない。

SB01、SB02は柱筋が確認できたに過ぎないが、概ね現代の町並みの方向と合致していることは注意される。

SB01（Fig.21、Ph.12）　調査区のほぼ中央で検出された。４個の柱穴が布掘りで連結されているが、溝の一部が試掘トレンチで消滅している。柱穴の深さは80㎝を測り、その中の１個は30㎝大の根石を入れている。

SB02（Fig.14） 調査区の西側で検出されたSK06、SE77の埋土を切る柱列である。

柱穴出土遺物（Fig.22）

195～200はその他柱穴からの出土遺物である。195は土師皿、196、197は同一の柱穴から出土し、196は小型の石鍋、197は足鍋の脚部か。198の褐釉陶器壷は内外面に施釉している。199は須恵器壷。200の平瓦は凸面に縄目を残すが、凹面の布目はナデ消されている。

銅銭（Fig.23）

本調査では３枚の銅銭が出土した。201はSE77の井筒埋土上層から出土した祥符元寶（初鋳年1108年）、202はSK107から出土した太観通寶（初鋳年1107年）、203はSK101近くの落ち込みから出土したもので、祥符元寶の可能性がある。周囲を研いで隅丸方形にしている。

表土出土遺物（Fig.22）

204～207は表土剥ぎ時に出土した遺物である。204は白磁合子。外面体部の上位と内面に施釉している。205の白磁椀底部は周辺を打欠かれている。206は内面見込みに文様を有す龍泉窯系青磁である。207も龍泉窯系青磁である。

骨 Ph.13はSX13から出土した鹿角である。切断面を残す。SE77、80からも哺乳類獣骨や鯛の魚骨等が出土したが量は少ない。

Ⅳ．おわりに

最後に遺構の時期と性格にふれておきたい。遺構の時期については白磁のいわゆる口ハゲを指標として13世紀後半から14世紀初頭の時期を下限とするものが多い。特に出土遺物が比較的多い井戸については陶器等からみても大宰府編年に照合すると13世紀から14世紀前半を下限とするものが多い。SX13は切合いからもそれを降ると考えられ、細弁の青磁が出土する。しかし、井戸の埋土からの出土を含め、調査全体からの出土遺物をみると白磁、龍泉窯系、同安窯系の各タイプの青磁等が出土し、また、土師皿等からも遡る12世紀後半以降の遺構が存在していたことを伺わせる。

SX13を除き14世紀後半以降として検出された遺構は備前擂鉢が出土した15世紀以降のSK132、近世のSK66がある。近世の遺構は少ないが、これは検出面の深さによるところが大きいと思われる。

生産関係の遺物については鉄滓が全体でコンテナ（深さ10cm）１箱未満と少ないが出土し、近接した10次調査でもみられた水注（181、182）を転用したガラス坩堝が今回の調査でも出土した。また柱穴から１点ではあるが、溶解したカリウム鉛ガラスが出土した。このガラスは宋代に開発されたクリスタルガラスで平安末以降近世まで広く流通したといわれる。

遺構では布掘の柱列やSB02などの柱穴が狭い範囲ではあったが、現在の敷地と平行して検出され、Ⅱで先述したが地形に合致した町並みが踏襲されていることを伺わせる。

箱崎遺跡群の場合、今回の調査を含め、近世以降の遺構が上層に多く、その堆積層（整地層を含め）を除去した地山に近い面ないし地山（砂丘面）の１～２面で調査を行うことが多い。従って検出面に掘り込んだ遺構の時期幅が広いので遺跡の存続時期は（報告書に掲載される）遺構の時期を決める遺物のみならず出土遺物全体からの様相をみておく必要がある。また、陶磁器の量は貿易量を示すが、特に絶対量が減少する傾向にある14世紀以降から中世末にかけて、これが、集落（都市の）変遷のどのような面を反映しているのかは多元的な要因（人口密度や移動ばかりではなく貿易量、南宋末以降の政治状況、貿易の主体や支配関係など）を考慮しておく必要があると思う。

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第814集
箱 崎 ２０

平成16年３月31日

発行　　福岡市教育委員会
　　福岡市中央区天神1丁目8−1

印刷　　アド印刷(株)
　　福岡市博多区博多駅南5丁目21番28号

箱崎20

（箱崎遺跡群第三十八次調査）

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第八一四集

二〇〇四

福岡市教育委員会